



大分大学理工学部(工学部)
同窓会機関誌
翔工
第28号

大分大学理工学部(工学部)同窓会「翔工会」
〒870-1192 大分市巨野原700 大分大学理工学部内
電話097-554-7804, 097-554-7823
平成30年3月17日発行

機関誌「翔工」第28号の発行にあたって

同窓会長 松尾孝美



機関誌「翔工」第28号をお届けいたします。同窓生の皆様におかれましては、益々ご活躍のことと存じます。また、平素より工学部同窓会の活動に対しましてご支援とご協力に心より厚くお礼申し上げます。

現在、同窓会機関誌を翔工会ホームページにて公開し、会員の皆様には機関誌を発行したことをお知らせするはがきを郵送いたしております。同窓生の皆様には、ご不便をおかけしますが、ご理解をお願いいたします。

翔工会HP : <http://shokou.csis.oita-u.ac.jp/>

また、同窓会行事の広報のために、Facebookを開設しています。Facebookで、「大分大学工学部同窓会」で検索していただければ、すぐに見つかると思います。

工学部は平成29年4月より、理工学部2学科8コースに改組され、理工学部1年生が入学しました。理工学部1年目の現状とこれからの取り組みについて、豊田学部長にご寄稿いただいております。なお、豊田学部長は平成30年3月で退任され、平成30年4月からは劉孝宏教授(機械コース)が理工学部長に就任予定です。工学部同窓会では、こ

の改組に伴い、同窓会の名称の変更および新部会の設立を行いました。名称を大分大学工学部同窓会「翔工会」を大分大学理工学部(工学部)同窓会「翔工会」に、これまでの8部会に加えて、新学科に対応する創生工学部会と共創理工学部会を新たに設立しました。

今年度は5名の教職員の方々が退職されます。機械コースの嶋田不美生技術職員、甲斐照高技術職員、電気電子コースの益子洋治教授、厨川明准教授、赤峰修一技術職員です。今回の機関誌では、退職される嶋田不美生先生から、これまでの思い出のご寄稿をいただきました。多くの同窓生が大変お世話になった先生方です。これまでのご恩に厚くお礼申し上げます。

2年前に「大分大学同窓会連合会」が設立され、昨年もホームカミングデーが大分大学にて、同窓生との合同交流会が福岡にて開催されました。詳しい内容は、以下のURLの同窓会連合会ホームページをご覧ください。なお、平成30年度の同窓生との合同交流会は、熊本地区が予定されていますので、近隣の同窓生の方々にはご出席のほど、よろしくお願い申し上げます。

同窓会連合会HP :

<http://www.alumni.oita-u.ac.jp/index.html>

工学研究科では、産業界の様々な分野で広い視野と専門性を備えたイノベーション博士人材の養成に取り組み、社会人博士課程学生の受け入れを積極的に行っております。また、学部改組に連動して、学年進行で大学院の改組も予定されています。同窓会員の皆様方におかれましても、博

士課程へ進学をご希望される方がおられましたら、ぜひご相談くださいますよう、お願いいたします。

末筆ではございますが、理工学部（工学部）同窓会の活動に、かわらぬご理解とご協力をお願いいたしますとともに、同窓生の皆様の益々のご発展を祈念申し上げます。

「平成29年の大分大学 工学部」

理工学部長（応用化学コース）教授 豊田 昌宏



理工学部同窓会「翔工会」会員の皆様には、益々のご活躍のことと存じます。私の今回の同窓会誌への寄稿は5度目になります。昨年「翔工」には、理工学部への改組の詳細についてご報告させて戴きました。今

回は、昨年4月に理工学部へ新入生を迎えた状況等についてお話しをさせて戴きたいと思っております。昨年、4月4日に理工学部；創生工学科および共創理工学科、それぞれ各4コースに新入生396名を迎えました。新たに設置されました、共創理工学科の数理および自然コースにそれぞれに、18および17名の新入生を迎え入れました。前期日程の入試では、数理コースで3.6倍、自然コースで6.9倍の倍率となり、従来からの建築コースでも5.1倍と理工学部への改組の影響か、総じて高い入試倍率となりました（理工学部平均で3.8倍）。入学してきた学生は、いずれも高い志をもった学生ばかりで、卒業時には、工学系を卒業する学生には「学士（工学）」を、理工学系を卒業する学生には「学士（理工学）」の学位が授与されます。4年後が楽しみです。

新たな理工学部の教育では、創生工学科、共創理工学科において理工融合を促す教育体系を構築しています。学部全体での理工融合科目として、「教養教育科目」において1年次前期に「基礎理工学入門」を新設し、講義を開始しました。この「基礎理工学入門」では、高大接続を目的として、創生工学科に対して物理・化学・生物・地学（物化生地）の基礎とその利用を、共創理工学科に科学技術の基礎を教育します。創生工学科での理工融合科目として、1年次後期に「サイエンス基礎」を新設しました。「サイエンス基礎」は、「基礎理工学入門」で学修した物化生地の基礎とその利用についてより深く学修する必修科目であり、理工融合教育への誘導を図ります。一方、共創理工学科での理工融合科目としては、1年次後期に「科学技術基礎」を新設しました。先端技術や応用技術と理工学分野との結びつきを俯瞰的に学修する必修科目であり、理工融合教育への誘導を図ります。また、地域産業の創生や理と工の共創を図った人材養成に対する地域のニーズから、3年次前期及び後期にそれぞれ「基礎理工学PBL」及び「応用理工学PBL」を必修科目として配置し、講義を行います。本科目を3年次に設定したことで、専門的知識の積み上げではなく、理工融合を基軸とした専門性の構築を図ることが可能となります。「基礎理工学PBL」では、前半で理工学部全体としての共通テーマである例えば「力」についてコースごとに概説を行ったのち、後半では、後期の「応用理工学PBL」に円滑に接続するため、所属する自コースでのPBL演習を実施することとしております。「応用理工学PBL」では、他コースの学生と共に混成チームを組んで専

門外のPBLを実施することで、異分野との融合的領域を主体的かつ実践的に学修する新しい講義を導入しております。主な融合科目を表に示します。

（表 主な理工融合科目）

学科	コース	教養教育科目	専門教育科目		
			理工学基礎教育科目	理工学展開科目	専門科目
創生工学科	機械コース	基礎理工学入門	サイエンス基礎	基礎理工学PBL 応用理工学PBL	計算理学基礎
	電気電子コース				サイエンス解析
	福祉メカトロニクスコース				
共創理工学科	建築学コース	科学技術基礎			基礎プログラミング
	数理科学コース				音メディア処理
	知能情報システムコース				統計科学A
	自然科学コース				応用数学A
応用化学コース					食品科学概論 生物化学 食品衛生化学1 食品衛生化学2

理工学部への改組に伴い、部局内の建物の名称の変更を行っています。これまでの工学部管理棟が、理工1号館、機械・電気棟が理工2号館と云うように（参照写真図1および2）、ナンバーで振り分けられ、学外から来られた人にもより判りやすい呼称となりました。また、教育学部にも理工学部へ異動された先生がいらっしゃることから、いくつかの教員および学生の居室ができ、学生にも判りやすくするため、建物の玄関に理工のタグが付けられております（参照写真図3）。さらにPBL等の多くの融合科目が新たに設けられたことから、応用化学棟の横に建てられておりました「廃液処理施設」が、理工第3講義棟に生まれ変わるべく現在工事を進めております（参照写真図4）。4月から新しい講義棟として生まれ変わります。

今後は、理工学部の年次進行に合わせて、大学院も工学研究科から理工学研究科に改組の予定です。次期学部長の下、新たな改組に向けた準備が始まっております。引き続きご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。これが私の最後の寄稿となります。今回は新学部長のお話になるかと思っております。複数年にわたり、つたない文面にお付き合いを戴きましてありがとうございます。皆様におかれましては、健康に留意され、益々ご活躍されますことを申し上げて、筆を置くこととします。



<写真図1（理工1号館）>



<写真図2(理工2号館)>



<写真図3(教育学部玄関)>



<写真図4(理工第3講義棟)>

新設された数理学コースと自然科学コース

いざな 「数理学コースへの誘い」

共創理工学科 数理学コース 教授 田中康彦

理工学部の設置に伴う新設の「数理学コース」についてご紹介いたします。

大分県で初めての数学や応用数学を専攻するコースです。名称から中身がわかるというのが自慢の一つです。本来は当たり前のことのはずですが、近ごろ流行りの改組ではそうならないことも多々あるようです。現役の学生、教職員はもちろんのこと、所属を離れた方々にとっても、自分自身の経歴としてより一層誇りに思えるのではないのでしょうか。

これまでの工学部では、数学は別の学問の基盤として捉えられることが多かったと思います。例えば卒業生の皆様^が在学中に履修された、微分積分学、線型代数学、応用解析学は典型的なものです。工学教育では分野ごとにさまざまな具体的な目標が定められているので、それに必要な知識やスキルを前もって準備しておくという姿勢であったと思います。

数理学コースのカリキュラムにおいても似たような部分が少しあります。特に初年次の科目はウォームアップから基盤固めという性格があり、どうしても定型的なものになりがちです。基礎をおろそかにすることはできないので、これはやむを得ないでしょう。しかしながら数理学コースは数学が好きな人たちの集まりです。自分自身の興味のために(仮にすぐには役に立つ場面が思いつかなかつとしても) やってみたいこともあるでしょう。それも視野に入れながら、これまでの工学部とは一味違うところを目指しています。

それでは、具体的なカリキュラムを観察してみましょう。

第一の特徴は、奇をてらわず、できるだけ普通のものにしたことです。けれども味はありません。おそらく日本中にある数学を専門とする学科・コースと大差はないと思います。数学は世界共通の学問です。ずっと昔から脈々と受け継がれてきたグローバルな体系が確立しています。私はまだ出会ったことはありませんが、その辺にいるかもしれない宇宙人たちとも、ちょっとした意思疎通の手続きさえ整えば、十分に議論ができるはずで、基礎の部分であえて逸脱する意味はないと考えました。しいて違いを探せば、初年次の基礎科目に十分すぎるほど時間をかけて鍛える体制にしたことくらいです。

第二の特徴は、伝統的・古典的な純粋数学と、他分野との連携も意識した応用数学を並行して履修する体制にしました。数理学を6分野(代数学、幾何学、解析学、応用数学、統計科学、情報科学)からなる構造体と考え、基礎

的なところは全員が、発展的な内容は興味に応じて修得していきます。最初の2年間でおおよそ基礎的な部分がカバーされるようにしました。将来どの分野に進んでもよいように、さまざまな題材を取り上げて論理的な思考力と自由な発想力を育てていきます。

さて数学において(あるいは他の学問分野においても?)、計算するという行為は非常に基本的で重要な思考プロセスの一つであろうと思います。それで計算について私の考えを述べておきます。数学においては、

- (1) 計算してその結果としてわかることから
- (2) 計算しなくても種々の事情を勘案すれば実は当たり前だとあとからわかることから

の両方があり、どちらも等しく重要であろうと思います。

はじめはたいていが(1)で、ある疑問が出発点になり、それを解決するためにいろいろな条件の下で計算をすることになります。うまくいくかどうかは、実際にやってみなければわかりません。学校で課される宿題や試験問題では、この際に必ず肯定的な結果が出るようあらかじめ細工されています。大いなる努力に少しの幸運が加われば、いろいろと面白い結果が得られます。かけた時間なりの成果が得られる場合が多いので、卒業研究などにもしばしば利用されます。皆様の多くが経験されたのはおそらくこのあたりまででしょう。

ここで終わりにせず、条件を変えて一般化したり、別の問題と融合したりと考えを進めていくうちに、背景にあるものがぼんやりと見えてきます。改めて全体を観察してみるうちに、事態が(2)に推移していくのが自分でもわかるようになります。そこにある背景事情を仮定すれば、新たな疑問や課題が浮かび上がり、再び(1)に移るという繰り返しです。このようなスパイラル方式で考えが進んでいく状況を「研究」と呼ぶように思います。数学において計算は、それだけでも十分に価値のあることではありますが、それで終わりにしてしまつてはもったいないと思います。本格的な数学が実はすぐそばまでやってきているからです。

改組後の最初の1年間はあつという間もなく過ぎてしまいました。この春から2年目に入り、新2年生はいよいよ本格的な数学に没頭することになります。彼らに数学の醍醐味を伝えられればと思います。

さてその2年生ですが、昨年の入試で第一期生となる18名が入学しました。入試の成績、プレースメントテストの成績ともに上々で、大変な手ごたえを感じたことは今でも

鮮明に覚えています。正直なところ十分な数の志望者が集まるかとても心配しました。秋の推薦入試で志願者がゼロだった時には、口先では予定通りと平静を装いながらも、いきなり定員割れだったらどうしようとても心配しました。幸いにも一般入試で優秀な学生を集めることができ、しかも合格者に逃げられることもなく、そろって理工学部の発足を迎えられることに、心から感謝いたしております。まじめで意欲に富む学生が集まりました。数学好きを自負する人の集団です。高校では口にするのがはばかれるほどの少数派だったのに、これだけの人数が集まってうれいという声も聞かれました。

彼らに数学に対する興味をさらに広げ、深めてもらうために、先生方と相談して「数理科学セミナー」をはじめました。数理科学の諸分野のトピック（学校で習う数学の先にあるもの）に触れてもらうためです。前期には教員が適当な題材を選んで50～80分程度の講義や演習を行いました。数学的な厳密性ははいては追求せず、それぞれのトピックや専門分野の面白さが実感できることを第一の目標にしました。きっかけだけ与えて（問題の所在だけ明らかにして）、必ずしも結論には至らないというスタイルも採用しました。後期には学生が発表する機会も設け、学習意欲の維持・発展や、数理科学に対する興味を展開を図りました。学生には読んだ本の紹介、自分で計算したこと、教科書の例題の別解など、題材は自由に選んでもらいました。参考のために、夏休み前に教員が図書を推薦しました。

このセミナーはカリキュラムには含まれないものであり、もちろん単位にもなりません。当初は参加者数を心配する声もありましたが、前期は9割以上、後期でも5割くらいの学生が参加しました。学生たちが自らの専門分野を決めるために何らかの示唆を得ることができるとすれば大成功ではないかと思えます。

この原稿が皆様のお手元に届くころには、新1年生が入学しているはずですが、学生数が二倍になり、さぞにぎやかになることでしょう。情景が目に見えます。コースの全体は当初の計画した姿にまた一歩近づいていきます。二匹目のどじょうを狙うというわけでもないですが、大いに期待が膨らみます。

最後に数理科学コースの立ち上げにかかわった教員としての思いをつづっておこうと思います。

数学を専門とする者が就職する際に最も好ましいのは「数学科」です。しかしながら諸般の事情により、それ以外に居場所を求めることも多々ありました。例えば「教養

部（今はない）」、「教育学部」、「工学部の応用数学系」、「工学部の共通系」などで、私もその一人です。所属を「数学科」にするために、改組を画策したり、異動のために運動したりという噂はあちこちで聞きました。特に大学設置基準の大綱化（平成3年くらい）の結果として教養部の解体がはじまったころは、ある種のチャンスだったかもしれません。しかしながら、全国的に見ても首尾よく事が進んだのはほんのわずかです。たいていはくたびれもうけに終わり、それ以後は何となく現状にダラダラと流されるのが常であったと思います。大分大学でも事情はほぼ同じでした。

今回の改組の話が出てきたのは、私も定年まであと一桁となり、このままずっと同じかなと思い始めたころです。瓢箪から駒が出るというのはまさにこのようなことを言うのでしょうか。大分大学にまさか数学を専門とする学科・コースができるとは夢にも思いませんでした。今回の理工学部への改組では、数学科以外に所属していた教員が核になり、外部からのよき人材も得て、ようやく作りあげました。でも単なる寄せ集めとは思わないでください。どこに出しても恥ずかしくない、名称に恥じない本格的な教育・研究組織ができたと思います。またその期待に応えられるであろう多くの学生も集まってくれました。発足してから間もなく一年が過ぎようとしていますが、いまだに感動冷めやらぬ状態です。

改組に際しては、同窓生の皆様にも多大なる支援をいただいたものと推察し、心より感謝いたします。これから学生を鍛えて、各方面で活躍できる人材を育てていくことが、わずかながらも皆様へのご恩返しになると信じております。今から3年後に大学院を改組し、理工学研究科を設置するという計画も控えています。どうか今後とも大分大学の理工学部を一層盛り立てただけますようお願い申し上げます。



「共創理工学科自然科学コースの紹介」

共創理工学科自然科学コース平成29年度コース長 教授 長屋 智之

理工学部への改組に伴い、定員が15名の共創理工学科自然科学コースが新設されました。このコースでは、生命科学、物質科学、地球科学などの幅広い理学分野を総合的に学ぶことができます。1、2年次においては、物理、化学、生物、地学の各基礎分野の講義と実験科目を学びます。また、工学のマインドを持つために、創成工学科の教員が担当する「科学技術基礎」を学びます。3年次以降では、自分が興味を持つ分野の専門科目を選択して学びます。従来理工学部には無かった理学系科目として量子論、分子構造解析、環境生物学、宇宙科学等を設けています。そして、4年次には表に示す専任教員の下で卒業研究を行います。教員が10名もいますので、きめ細やかな卒論指導を受けら

れることが特徴です。

本コースを立ち上げるにあたり、工学部の電気電子工学科から物理系の教員が3名移籍し、教育福祉科学部から化学系1名、生物学系2名、地学系2名の教員が移籍しました。さらに本コースを充実させるために、物理系1名、生物系1名の教員が新規に採用されました。生物系と地学系の教育・研究ができるようになった事も大きな特徴と言えます。生物学に関しては、共創理工学科の入試科目にも取り入れられました。

当コースでは、自然科学を学ぶ上でフィールドワークが重要であると考えています。そのため、地学実験、生物学実験、地域資源フィールドワークなどで野外研修を行いま

教員名	専門分野
芝原雅彦教授	構造有機化学
末谷大道教授	非線形物理学、複雑系数理論科学
仲野誠教授	天文学、星間物質、星形成領域
長屋智之教授	液晶物理学、非線形科学
泉好弘准教授	植物形態学、細胞生物学
岩下拓哉准教授	液体やガラスの物理学、微粒子の流れ
北西滋准教授	保全生物学、分子生態学
永野昌博准教授	生態学、生物多様性学
西垣肇准教授	海洋物理学、気象学
近藤隆司講師	低温物性、教育工学

す。フィールドワークの雰囲気を早く味わうために、新入生の研修は地学的、生物学的に特徴の有る場所で行います。今年度は、佐賀関の関崎海星館を訪れ、豊予海峡の潮流や渡り蝶のアサギマダラの観察、望遠鏡による太陽表面現象の観測などを行いました。そして、周辺の海岸で特徴的な黒色片岩や蛇紋岩の観察を行いました。写真1は天体望遠鏡のドーム内での記念撮影です。

上記以外の特徴として、中学校、高校の教員免許が取得できることが挙げられます。必修科目の多くを教員免許に関わる科目として設定しているために、教職科目と教育実習を余分に履修すれば比較的負担が少なく教員免許を取得できます。平成29年度入学生の場合、17名中13人も学生が教員免許の取得を目指しています。教育学部での教員養成が小学校教員を中心にするようになったため、大分県での中学校、高校教員の理科教員養成については当コースが中心的役割を担うことが期待されています。

最後に「自然科学セミナー」について紹介します。最先端の研究の雰囲気を学生に感じてもらうために、第一線の研究者の研究を聞くセミナーを実施しています。今年度は、末谷教授と共同研究されている日本医科大学の藤崎弘土先生が、「複雑な分子はどんな道筋を通して、どれくらい速く反応するのか？ - 生体分子の構造変化とレイイベント -」

という演題でセミナーを行って下さいました(写真2)。学部生には難しい内容でしたが、積極的に質問する学生もいて、参加した学生には良い刺激になったようです。

新しい理学系のコースですので、産業界にご理解が頂けるようになるまで学生は就職活動に苦勞することが予想されます。理学系の学生というあまり役に立たないというイメージをお持ちの方が多いと思いますが、実際には理学系の学生も産業界で活躍しています。私共も広く社会で活躍できるように学生を指導しますので、同窓会員の皆さまには卒業された学科・コースの後継コースだけで無く、自然科学コースの行く末を暖かく見守って頂くようお願いいたします。また、就職関係で本学を訪問する事がありましたら、是非当コースの就職担当教員にもお声がけ下さるようお願いいたします。



<写真1 佐賀関の関崎海星館での新入生研修>



<写真2 第1回自然科学セミナー 日本医科大学・藤崎先生の講演>

退職される先生方より

「大分大学でのこれまでを振り返って」



自分自身が迎えることとなり、過ぎ去りし時間の速さを改めて感じています。

昭和51年に工学部機械工学科の技術職員として採用され、福岡から赴任してきました。配属先は熱工学研究室で、これまでに吉岡教授や浜武教授(現大分大学名誉教授)、現在は田上教授からと、公私にわたりご指導いただきました。また、赴任当日に実習工場(現基盤技術支援センター)を案内され、旋盤やフライス盤などの工作機械、また、鋳造

同窓生の皆様、本年3月をもちまして定年退職することになりました技術部の嶋田と申します。本会副会長であります戸高先生のご依頼により、初めて寄稿させて頂くことになりました。これまでは他人事にしか思っていなかった定年退職

理工学部技術部 技術専門員 嶋田 不美生

や鍛造・溶接の設備等について、当時の技術職員から説明して頂きましたが、それぞれの個性には強烈な印象として今でも鮮明に記憶しております。今までの学生時代には経験しなかったようなことで、いきなり社会人としての厳しさも教えられたような気がしました。お陰をもちまして無事この時を迎えることができ、先生方や先輩方には感謝申し上げます。

あれから42年、当然のことながら大学内外で様々な変化がありました。赴任当時の工学部は5学科でしたが、その後3学科が設立されて8学科となりました。その間には産組もあり、機械工学科はエネルギー工学科と合併して生産システム工学科(H3)になり、その後、機械・エネルギーシステム工学科(H15)から、現在の理工学部創生工学科機械コース(H29)となりました。また、大学周辺の環境においても、JR敷戸駅(S62)とJR大分大学前駅(H14)の開業や大学への接続道路の変更は、その代表的なことではないでしょうか。

技術職員としての業務体制にも大きな変化がありました。これまでは各研究室・講座のもと業務に携わってききましたが、各学科・コースの技術職員を組織化し、平成19年5月に工学部技術部が発足しました。これまでの研究室における教育・研究支援業務に加えて、事務部や他学部からの大学運営に係わる業務支援であったり、学外での地域貢献活動であったり、技術部として独自の活動も行っています。その他の活動内容等に関しても理工学部技術部のホームページで公開していますので、一度覗いていただくと幸いです。

個人的には体力面の変化（衰え）も拭えません。赴任当初から本学教職員で構成されたバレーボールチームに所属し、昼休みには毎日のように汗をかいていました。しかしながら、メンバーの高齢化とともに人数も徐々に減少し、当時の学生さんにも加わって貰いながら何とか凌いでいましたが、それも私が30歳のときに立ち行かなくなりチームは解散することになりました。ちなみに、他大学とのバ

レー交流戦も当時から行っており、解散から30年経った今でもそれは継続しております。当然メンバーは世代交代していますが、年1回のその時だけチームの一員として復活します。その後はバドミントンに乗り換え、昼休みだけでなく週2回ほど学外でもやっていました。バドミントンは想像以上にハードで、膝・肘・腰などに大きなダメージがきます。若かりし頃は気にもなりませんでしたが、還暦を迎えた現在ではそうはいきません。ラケットを杖代わりに、とまではなっていませんが、健康維持の一環として楽しんでいます。今後も囑託職員として大分大学での勤務は継続しますが、身体に支障を来さない範囲でバドミントンも続けたいと思っています。

最後になりましたが、これまでお世話になりました教職員の皆様に感謝申し上げますとともに、大分大学理工学部（工学部）同窓会の益々のご発展と同窓生皆様のご活躍を祈念申し上げます。

大分大学理工学部設置記念式典報告

同窓会会長 松尾孝美

平成29年9月5日(火)、大分大学理工学部の設置記念式典・講演会および祝賀会がレンブラントホテル大分にて開催されました。県内外の行政、団体、企業関係者および学長をはじめとする学内関係者など約170人の方々がご出席されました。

記念式典では、北野正剛学長の式辞の後、来賓として、県知事の祝辞を安東隆副知事が代読され、小手川保正大分県工業連合会会長より祝辞がありました。次いで、豊田昌

宏理工学部長から挨拶がありました。

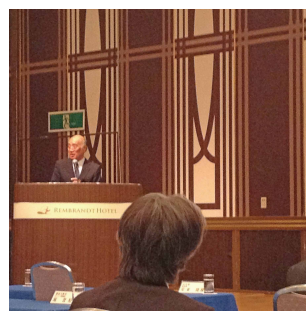
記念講演会では、信州大学の遠藤守信特別特任教授により、「ナノカーボンで拓く炭素の世紀 ～理学と工学の融合で実現～」と題して講演がありました。祝賀会では、佐藤樹一郎大分市長の祝辞がありました。その際の写真を以下に掲載します。なお、同窓会から式典実施を支援するために、後援会と協力して実施費用の一部を寄付しました。



<北野正剛学長挨拶>



<豊田昌宏理工学部長挨拶>



<遠藤守信特別特任教授による記念講演>



<祝賀会での豊田昌宏理工学部長挨拶>



<祝賀会での越智義道理事挨拶>

「大分大学ホームカミングデー2017」報告

同窓会会長 松尾孝美

学生交流会館B-Foret (ピ・フォーレ) にて、11月5日(日)に「ホームカミングデー2017」が開催され、同窓生58名(翔工会からは5名の参加)が出席されました。

第一部「交流会」では、北野正剛学長と秦政博同窓会連合会会長より挨拶がありました。続いて、同窓生を代表して、理工学部(工学部)同窓会の翔工会会員である佐賀大学芸術地域デザイン学部有馬隆文教授による「風景から『学び』を考える-世界の街並みめぐり-」と題した講演がありました。最後に、各学部長等から各学部・研究科等の現状説明が行われました。第二部「懇親会」では、豊友会の秦政博会長および大谷真忠名誉教授より挨拶がありまし

た。次いで、高倉健玉樹会会長の音頭で乾杯が行われ会食となりました。会食中に各同窓生からスピーチがありました。最後は、古田佳代子桜樹会会長による閉会の挨拶がありました。以下にそのときの写真を掲載します。

<右写真 交流会風景1>



<交流会風景2>



<有馬佐賀大学教授による特別講演>



<左から江崎先生、有馬先生、越智先生>



<右から豊田先生、有馬先生、松尾>

『同窓生との合同交流会』in 福岡2017の報告

同窓会副会長 戸高孝

平成29年9月30日(土)に福岡市天神のホテル福岡ガーデンパレスにて「大分大学『同窓生との合同交流会』in 福岡2017」が開催されました。合同交流会では、各学部・研究科等の同窓生が一堂に会し、初めに同窓会連合会役員および大分大学役職者が紹介され、北野正剛学長の開会挨拶、秦政博同窓会連合会会長の挨拶の後、大分大学と同窓生との情報の共有と一体感の醸成を図る目的で、各学部等の現状紹介がありました。理工学部につきましては、豊田理工学部長からパワーポイントを用いた詳細な報告がされました。今年度4月より工学部は理工学部へ改組されて、1年次生が入学しています。まだ一般教養科目の履修が主なため、学部内での大きな変化はありませんが、新設のコースや統合されたコースでは、専門科目の開設や実験科目の改定のための準備が着々と行われています。

懇親会においては、秦政博同窓会連合会会長の挨拶の後、

恩師として出席された内野順雄名誉教授(元経済学部)の挨拶があり、松尾孝美会長の乾杯の音頭で始まり、恩師・同窓生の世代や出身学部等を越えた交流が行われました。また、同窓生からの近況報告があり、翔工会からは、深田啓輔 福岡副支部長からご挨拶をいただきました。交流会・懇親会参加の同窓生数は合計42名で、翔工会からの出席者は以下の9名でした(松尾孝美会長、戸高孝副会長、深田啓輔 福岡副支部長、楠敦志 理事、岩屋光正氏、高瀬敏氏、松尾哲也氏、松永藍氏、吉田光慶氏)。30代~40代の参加者が比較的少なかったですが、次年度以降も場所をかけて開催されるようですので、ご都合が合いましたら是非ご参加いただければ幸いです。

※下記URLに交流会や懇親会の写真が掲載されています。

(一部を本誌に掲載します。)

<http://www.alumni.oita-u.ac.jp/annai/fukuoka17kiji.pdf>



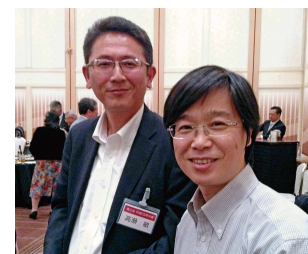
<合同交流会 北野学長挨拶>



<懇親会 秦豊友会会長の開会挨拶>



<左から 松尾哲也氏、楠理事、深田福岡副支部長、松尾会長、戸高副会長>



<左 高瀬敏氏、右 深田福岡副支部長>

お知らせ

・退職者の紹介

創生工学科電気電子コースの益子洋治教授、厨川明准教授、創生工学科機械コースの嶋田不美生技術職員、甲斐照高技術職員、創生工学科電気電子コースの赤峰修一技術職員が平成30年3月をもって退職されます。

・学位取得者の紹介

平成28年度博士学位を取得された方々を紹介いたします。(学位記番号順・敬称略)
山本 剛、原田浩司、山田高慶、RATRIANA SAID BUNAWARDI

同窓会活動状況

平成29年度の活動状況および現在の理事、評議員の名簿を以下に掲載いたします。

■ 活動状況

§ 平成29年5月30日(火)

第1回 理事会 (大分大学にて)
議題

- (1) 役員の交代について
- (2) 平成28年度 収支決算書 (案) について
- (3) 平成29年度 予算書 (案) について
- (4) 監査について
- (5) 平成28年度 評議員会よりの検討事項について
- (6) 理工学部記念式典への対応について
- (7) 同窓会連合会について
- (8) その他

§ 平成29年8月3日(木)

第2回 理事会 (大分大学にて)
議題

- (1) 役員の交代について
- (2) 平成28年度 収支決算書 (案) について
- (3) 平成29年度 予算書 (案) について
- (4) 平成29年度 評議員会について
- (5) 理工学部設置記念事業について
- (6) 同窓会連合会行事について
- (7) その他

§ 平成29年9月30日(土)

大分大学と同窓生との交流会 in 福岡
(福岡市 福岡ガーデンパレスにて)

§ 平成29年10月7日(土)

評議員会 (大分市 コンパルホールにて)
議題

- (1) 平成28年度 事業報告
- (2) 平成28年度 決算報告
- (3) 平成29年度 事業計画 (案)

(4) 平成29年度 予算書 (案)

(5) その他

(6) 平成30年度 評議員会開催予定 (案)



<評議員会集合写真>

評議員会終了後懇親会



<懇親会写真>

§ 平成29年11月5日(日)

大分大学ホームカミングデー2017
(大分大学にて)

§ 平成29年12月8日（金）

第3回 理事会（大分大学にて）
議題

- (1) 平成29年度 評議員会報告と検討事項のまとめ
- (2) 機関誌「翔工第28号」の編集について
- (3) 大分大学ホームカミングデー2017報告
- (4) 大分大学と同窓生との交流会 in 福岡
- (5) その他

§ 平成30年1月25日（木）

第4回 理事会（大分大学にて）
議題

- (1) 機関誌「翔工第28号」の編集について
- (2) 卒業祝賀会および卒業記念品、退職記念品について
- (3) 平成29年度 評議員会よりの検討事項について
- (4) 役員交代について
- (5) 卒業生の住所調査について
- (6) 同窓会連合会について
- (7) その他

§ 平成30年3月中旬

第5回 理事会（大分大学にて）

§ 平成30年3月17日

機関誌「翔工第28号」発行予定

§ 平成30年3月22日

卒業祝賀会開催予定

§ 平成30年3月26日 大分大学同窓会連合会役員会

開催予定（会場未定）

■ 支援助成事業等

§ 学科・留学生補助：留学生友の会（年会費）、各部会の学科行事補助（講演会補助など）

§ 理工学部設立記念事業

（平成29年9月5日（火）、レンブラントホテル大分）

■ 理事名簿

会長	松尾 孝美	（エネ昭55卒）
副会長	戸高 孝	（電気昭58卒）
会計	楠 敦志	（電子平2卒）
	下地 広泰	（博士課程平15修了）
顧問	新見 昌也	（機械昭59卒・61院修了）
	斎藤 国壽	（機械昭53卒）
	森 勝浩	（機械昭63卒）
	藤澤 徹	（電子平5卒・7院修了）
	雲井 将文	（電気平2卒・4院修了）
	吉野 清己	（機械昭52卒）
	苜木 禎史	（電気平3卒・5院修了）
理事	松岡 寛憲	（機械昭51卒、機械部会長）
〃	都築 彬史	（修士課程在学、機械副部会長）
〃	吉田 拓也	（修士課程在学、機械代表理事）
〃	原 正佳	（電気平3卒・5院修了、電気部会長）
〃	樋田 雄二	（電気平4卒・6院修了、電気副部会長）
〃	佐藤 尊	（博士課程平23修了、電気代表理事）
〃	西島 恵介	（組織平1卒・3院修了、組織部会長）
〃	賀川 経夫	（組織平3卒・5院修了、組織副部会長）
〃	足立 徳子	（組織平5卒、組織代表理事）
〃	牛ノ濱三久	（応化平7卒・9院修了、化環部会長）
〃	古木 信次	（修士課程在学、化環副部会長）
〃	大城 憂士	（修士課程在学、化環代表理事）
〃	斎藤 晋一	（エネ平2卒・4院修了、エネ部会長）
〃	矢田 健二	（エネ平21卒・23院修了、エネ副部会長）
〃	尾崎 大地	（修士課程在学、エネ代表理事）
〃	小林 祐司	（建設平8卒・10院修了、建設部会長）
〃	田中 圭	（建設平10卒・12院修了、建設副部会長）
〃	富来 礼次	（博士課程平15修了、建設代表理事）
〃	楠 敦志	（電子平2年卒、電子部会長）
〃	河野 将司	（電子平29年院修了、電子副部会長）
〃	木元 裕貴	（修士課程在学、電子代表理事）
〃	村上昂太郎	（修士課程在学、福祉部会長）
〃	橋津 真教	（修士課程在学、福祉副部会長）
〃	平野 遥	（修士課程在学、福祉代表理事）

■ 評議員名簿

大分支部	支 部 長	江口 正一	（エネ昭54卒・56院修了）
	副支部長	塚本 賢治	（知能平19卒・21院修了）
	副支部長	東 宏治	（エネ平11卒・13院修了）
福岡支部	支 部 長	小田 誠雄	（組織昭59卒・61院修了）
	副支部長	上田 和徳	（建設平3院修了）
	副支部長	深田 啓輔	（化環平5卒・7院修了）
熊本支部	支 部 長	柿下 耕一	（電気昭61卒）
	副支部長	水野 節	（機械平14卒・16院修了）
	副支部長	本田 恭久	（福祉建築平20卒）
大阪支部	支 部 長	平岡 学	（機械昭63卒・平2院修了）
	副支部長	黒木 亮爾	（電子平15卒・17院修了）
	副支部長	橋本 芳典	（電気平12卒・14院修了）
東京支部	支 部 長	柏原 康彦	（機械昭56卒）
	副支部長	後藤 正徳	（エネ昭57卒）
	副支部長	豊田 耕一	（電気昭58卒）

研究室だより

機械・エネルギーシステム工学専攻
流体研究室 M1 溝口 貴久

私の所属する流体研究室では、濱川洋充教授、栗原央流准教授、石松克也助教、奥林豊保技術職員のご指導の下、博士前期課程10名、学部生12名で日々研究活動を行っています。以下に主な研究内容を紹介します。

・ドローンから発生する空力騒音の低減化に関する研究

今日、環境と人間により優しい機械が望まれており、低騒音化もその一つです。これは、ドローンの翼周りの騒音に関しても例外ではありません。各種機械の低騒音化は、音源もしくは騒音を発生する装置を防音材で覆うことにより、低騒音化がなされている場合が多いのですが、流体機械はその構造上、全てを防音材等で覆い、低騒音化をはかることは不可能です。したがって、騒音の発生機構を明確にすることにより、ドローンの翼からの騒音の低減化をはかる必要があります。近年、ドローンの実用化は急速に進んでおり、飛行するという基本的な性能だけでなく、その活用領域は、農業、警備、測量など多岐に渡っています。しかし、横風によって安定性が失われることや、大きな騒音などの問題点が指摘されています。翼から発生する空力音の低減には後縁のセレーションが有効であることが知られています。しかしながら、翼の揚力が低下するため、セレーションの導入には、翼の性能についても検討する必要があります。本研究では空力騒音に及ぼすセレーションの影響を実験的に調査しています。

・マイクロジェットによる吸音現象のメカニズムの解明

近年、航空機の騒音は社会問題となっています。騒音の低減化のため、混合促進装置を排気ノズルに装着し低騒音化を図る技術があります。しかし、これらの装置は航空機の巡航時に推力の損失を増加させてしまうことが問題点となっています。この問題の改善を期待できる技術として、マイクロジェット噴射を利用した騒音の低減化が研究されています。これは、排気ノズル外周囲の十数か所から排気ジェットに向けマイクロジェットを噴射することにより、ジェット騒音の低減を図ろうとするものです。巡航時にはマイクロジェット噴射を停止することにより、推力の損失を抑えることが出来ます。しかし、その吸音特性のメカニズムは解明されていません。本研究では、音響インピーダンス管内に多孔板を設置し、管内に空気を流入してマイクロジェットを発生させ、2マイクロホン法を利用して吸音特性を測定しています。現在は、PIVを用いて多孔板前後の流れを可視化し流れの様子を調べる研究を進めています。

・プラズマアクチュエータを用いた2次元翼から発生する空力音の低減化に関する研究

近年、ファン騒音の低減化が強く望まれており、OA機器の冷却ファンなどに関する研究が数多く行われています。すでに騒音の原因となる羽根車内の流れの構造などが数値解析的に明らかにされています。また、気流中に設置された2次元翼からは空力音が発生することが知られており、翼から発生する空力音の低減には、セレーションや柔毛材、多孔体などが効果があることが知られています。しかし、これらの方法を用いると、空力音だけでなく性能も低下するため、性能低下の無い空力音の低減化技術の開発が強く望まれています。そこで、新しい流れの制御法として、DBDプラズマアクチュエータが注目されており、二次元

翼周りの流れのはく離の制御などに有効であることが明らかにされています。

本研究ではアクチュエータを二次元翼や軸流ファンに設置し、空力音や効率に与える影響を調べています。

・音響共鳴現象発生時の管群から放出される渦の同期特性に関する研究

ボイラは火力発電所、原子力発電所、船舶、工場などで多く利用されています。ボイラの主要部は燃焼室（バーナ）と再熱器から構成されており、再熱器の管群を設置することによってボイラの効率が上がります。しかし、それには1つの問題点があります。管に直交してガスが流れることが原因で、あるガス流速に達すると低重音が発生することです。それによる大騒音の発生、最悪の場合にはプラントの負荷上昇が困難になるばかりか、振動により構造の破損を引き起こす恐れがあります。この超低音の発生現象は、「管群による気柱共鳴現象」と呼ばれています。本現象は、管群から周期的に放出される渦に起因して発生すると考えられていますが、その詳細は未だ明らかにされていません。本研究では、実機ボイラの二次元相似模型を用いて、管抗力方向の管ピッチ比が小さな格子配列管群における気柱共鳴現象における音響共鳴現象発生前後の渦の同期特性を実験的に調査しています。

電気電子工学専攻

秋田・緑川研究室 M1 西藤 渉

現在、本研究室では秋田昌憲教授、緑川洋一准教授、西村安生技術職員のご指導のもと、博士前期課程1名、学部生9名で研究を行っています。以下に今年取り組んだ研究をいくつか紹介します。

・体内音による入眠予兆検出法の改善

今日、入眠予兆の検出をすることにより居眠り運転などの交通事故を防止する研究が行われている。本研究では人間の体内から発生する生体信号を周波数解析し条件を変えることにより入眠予兆の検出の改善を行う。

・音声合成による雑音の軽減

近代のコミュニケーション手段は携帯電話などの通信機器が利用されている。その際に、電波や騒音などで発声する雑音（ノイズ）を、ケプストラム次数を変化させ音声合成を利用し、発声している雑音を軽減させ、音声通信を聞きやすいように改善する研究を行っている。

・騒音音質評価

現在の騒音対策は音の大きさのみの規制がされている。しかし、実際には、音の大きさが同じでもより不快に感じる音があり、明らかに音の大きさが小さい場合でもそちらの音のほうに意識が向くこともある。そこで、周波数の違いによって不快感の感じ方が違うことに注目し、音声スペクトルの解析を行い新たな音の評価基準を設けることで、より適切な規制を設けたり、騒音を減らすことができるようになることを考えて研究を進めている。

・ウェーブレットスペクトルにおける圧縮を利用した雑音環境音声認識の検討

ウェーブレット変換を用いて周囲の環境が変化した場合や高雑音時の音声認識方法の工夫や、悪条件下での音声信号の品質改善、口唇や顔画像の音声認識への応用などの研究をしています。

最後に、卒業生皆様のますますのご活躍を心からお祈り申し上げます。また、大分大学にお越しの際はどうぞ研究室に遊びにいらしてください。研究室一同心よりお待ちしております。



応用化学科 平田研究室 M2 古木 信次

私たちの研究室は、平田誠准教授、國分修三技術職員のご指導のもと、博士前期課程7名、学部生4名で研究に取り組んでいます。当研究室では、主に乳酸発酵を用いて有機性廃棄物の有効利用を目的とした物理的・化学的・生化学的処理に関して研究しています。特に生化学的手法では、有用微生物を探索し、発酵特性などを明らかにするとともに環境負荷の低い新規操作法・装置を提案しています。また、最近ではメタン発酵も行っており、それにより得られたメタンをエネルギーとして利用する研究も行っています。今回はその中から乳酸菌による乳酸発酵を用いた廃棄物の再資源化について簡単に説明します。

乳酸菌とは、炭水化物を発酵してエネルギーを獲得し、多量の乳酸を生成する一群の細菌の総称です。乳酸菌による発酵は、食品の生産・保存、家畜の飼料、植物の肥料など様々な面で用いられています。しかし、乳酸菌の増殖には多くの種類の栄養素が必要なため培地のコストが高くなります。そこで、当研究室では廃棄飲料・焼酎粕などの未利用資源を乳酸発酵の栄養源として活用することによって乳酸発酵培地のコスト低減、また廃棄物を乳酸発酵することによって肥料化・飼料化し、再資源化することについて取り組んでいます。

行事としては新4年生歓迎会や、バレーボール大会、暑気払い、忘年会などがあり、これらを通して親睦を深め、先輩後輩同士とても仲良く、みんなで協力し合いながら楽しく研究に取り組んでいます。

創生工学科 建築学コース 助教 秋 吉 善 忠

卒業生の皆様、はじめまして。お元気で過ごしてでしょうか。2017年7月から大分大学理工学部創生工学科の建築学コースに助教として着任しました秋吉善忠と申します。私は2006年に大分大学工学部建設工学科を卒業後、博士課程に進学し2012年に博士（工学）の学位を同大学で取得しました。その後、大学発のベンチャー企業ゼロテクノに就職し、2013年には愛媛県新居浜市の住友共同電力グループで、火力発電所の副産物である石炭灰の有効利用とコンクリート構造物の長寿命化に関わる仕事に携わりました。修了した当時は、まさか大学教員になる日が来るとは夢にも思いませんでしたが、このようなチャンスが与えられ深く感謝しています。

私が所属する研究室では、主に副産物の有効利用やコンクリート構造物の長寿命化を目指した研究に取り組んでいます。学生や先生、研究員の方々と楽しく実験に励んでいますが、一度社会に出たことによって、改めて研究の重要性や価値について考えさせられています。ぜひ、学生の方々にも、その重要性や研究の楽しさを少しでも感じて頂きたいと思っています。また、地球環境やコンクリート構造物に関する課題は尽きませんが、私たちの研究がそれらの課題の解決に少しでも貢献できればと願っています。

着任してから既に半年余りが経ちました。30代半ばにして大学の新米教員として歩みを始めたわけですが、気を新たに、学生の方々をはじめ、大学や社会にも貢献できるように精一杯頑張っていこうと思います。

卒業生の皆様、大分にお越しの際には、ぜひ大学にも顔を出して頂ければ幸いです。皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

会員だより

「熊本地震の教訓」

黒木 正 幸
平成3年 建設工学専攻修了

私は、昨年9月、出身の研究室に帰ってきました。平成28年熊本地震の際は、崇城大学（熊本市）に勤務しており、建築構造学の教育研究をしていたことから被害調査に明け暮れる日々を送りました。鉄筋コンクリート造建物に関しては、旧基準で設計された建物に大きな被害が見られました。一方で、旧基準の建物でも耐震補強をした建物では倒壊したものもなく、耐震補強の有効性が確認されました。そんな中で特徴的な被害は、耐震補強済の建物でも杭の損傷により建物に傾斜や沈下が生じ、建て替えとなるケースが散見されたことです。これまでは、杭が損傷しても建物が倒壊に至るリスクは小さいこと、杭を含む基礎構造の耐震診断と耐震補強には大きなコストが必要なこと等から、基礎構造の耐震診断は見送られるケースが多かったです。そのような建物の中に、問題のあるものがあつたというこ

とです。今後は、基礎構造も含めた耐震診断と耐震補強を求められるケースが増えると考えられます。それにどう答えるかが我々の分野における課題の一つであると思います。

「自由の女神、ほほ笑む」

橘 恵
昭和55年 電気工学科卒業

- ・当時の総額、(日本円にして)400億円を超える米国ニューヨークの超大型商談を受注した瞬間に、出張先のニューヨーク市内から本邦側へ向けて我々応札チームが発信した受注速報である。この商談に1年前から技術提案取り纏めの担当として参画していた。この商談獲得でこれまで殆ど納入実績の無かった巨大なアメリカ市場へ初参入を果たし、その後の北米事業の拡大に繋がることになった。
- ・大分大学を卒業する時、自分が鉄道業界に進むこと、海外事業に配置されること、設計から幾つかの職種を経て

最終的に、「プロジェクトマネジメント」で生きることになるとは誰が想像出来ただろうか？

- ・自分はこの受注の後、会社からプロジェクトの現地側代表を任せられ、マンハッタンに新規に開設された事務所に赴任。その後の運命に大きな影響を与える事になる新たな業務に就いた。

この度、同窓会長松尾様に貴重な機会を頂いたので、卒業以来与えられた業務にひた走ってきた自らの経験を振り返りながら、遠くなくなってしまった大学時代にも思いを馳せてみたい。

- 大学時代に学んだこと：電気工学に関することのみならず機械にもエネルギーにも関心が高かったように思う。友人も、専攻した学科を超えて広くおつきあいさせて頂いた。毎日、授業から帰ると寒田川沿いを神社までジョギングして体を鍛えたことも懐かしい思い出である。体を鍛えることが如何に大切かは社会人になって身に染みて感じた。学生時代はいい自然環境にも恵まれて幸運であった。

- 就職活動：ゼミは特殊な電動機の研究であったが、就職活動では寧ろ日立製作所ご出身の教授がおられて業界の事を色々教えて頂いた。そこで当時就職先として、日立系の会社を第一志望にしたいと報告したが合意頂けなかった。代わりに「君は三菱が合っている。三菱電機に行け」と言われた。今から思えば誠にその通りだったと思う。入社以来、今の会社で思う存分自分の持ち味を出して働くことが出来た。先生はわかっていたのだ。

一点だけ、三菱を勧めて頂いた教授が最後に言われたこと。「その後、九州に帰ってきて会社を作れ」

これは残念ながら実現しなかった。先生の言われるようにしていたら今頃はまた違った人生になっていたかもしれない。

- 鉄道車両向けの制御装置設計：モータを専攻した学生だったが就職した会社で配属されたのは鉄道車両を駆動する制御装置の設計課であった。ちょうど入社した年は制御装置の設計課に人員の不足があった。翌年は電動機関係の設計課に欠員があり、別の新人が配置された。社会に出るとどういふ仕事をするようになるのか自分で決められる事は少なく、与えられた仕事で成果を出す様に働くことが大事と学んだ。その後は無我夢中で、安全で安心できる、乗り心地さえも決める電車の走行制御は奥が深く、他の事を考える余裕は無かった。石の上に3年座り、何とかやっていけるという手応えを掴む。

- 入社8年後にアメリカ合衆国に初めて出張する機会を得た。仕事は鉄道ではなく、コンピュータ用ハードディスクドライブの販促活動であった。その後、顧客の信用を得てロサンゼルスに駐在し事業拡大に従事した。その後、鉄道事業に戻り10年後、上述した北米事業参入に成功し、

ニューヨークに着任することになる。その後、ピッツバーグと計3回米国出向を命ぜられ現地で働いた。何れも家族を帯同した。

- 仕事に生きる個性：大分大学の学生時代、電気工学科は設立から間が無く、自分が第5回目の卒業生だと認識していた。言いかえれば、先輩を頼って就職することは出来ず、寧ろ自分たちが後輩たちのよき先輩となって社会で実績を作っていくかねばならないという思いだった。比較的自由的な雰囲気の大学キャンパスで、スポーツや先輩との交流をよくやった。同じアパートの先輩にもよく声をかけて頂き、酒の席で楽しい時間を過ごした。こうした、交友範囲を広くし、誰とでも気軽におつきあいさせて頂く性分は会社に入った後の仕事、特にライフワークとなる“プロジェクトマネージャ”の仕事に生きることになった。自分にあった仕事を追い求めてきた訳ではないが結果としてそこにたどり着いた。

- プロジェクト管理：鉄道車両を製作し、納入すると言うプロジェクトは最初の車両完成まで普通3年程かかり、その後の量産納入を全て終えてプロジェクトが終了するのに少なくとも5年～6年はかかる。こうした息の長いプロジェクトは参画する人も多く、顧客との契約内容も多岐にわたり、多くの仕事が必要になり、かつ米国では英語が必要だ。学生時代の教養課程で英語の成績が悪かった等と悠長に反省する暇は無い。目の前のお客と必死に意思疎通に努め、プロジェクトを前に進めたというのが実感である。

さて、大学には将来を夢見て、勉強に励む人、運動で体を鍛える人、また専門領域を深く勉強をしている人、多くの学生の方がおられると思うが、自分自身の可能性を信じ、大分大学の学生として誇りを持って、積極果敢に国境線の無い大きな世界へ飛び出して行って頂きたいと思う。道は自ずと拓けてきます。是非頑張ってください、心から応援しています。



<ニューヨークにて（写真右から2番目 筆者）>

お知らせ

●卒業証明書の問い合わせについて

最近、同窓会に卒業生から卒業証明書の問い合わせが多く見られます。同窓会では証明書等の発行業務は行っておりませんので、卒業証明書等のお問い合わせやお申込みは、右記のところにお願いいたします。

住所：〒870-1192

大分市大字巨野原700番地

大分大学理工学部学務係

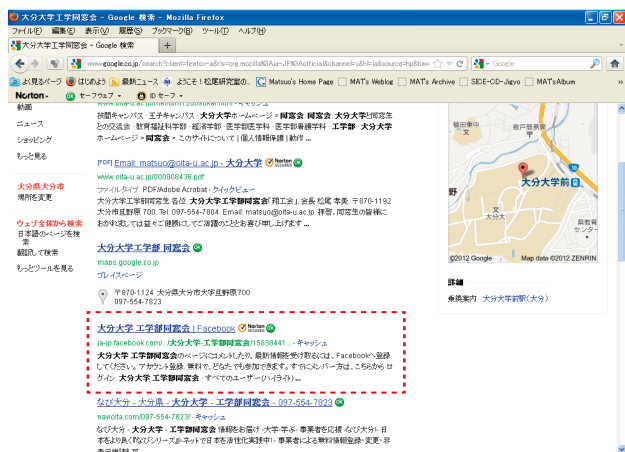
電話：097-554-7757 または、7758

大分大学工学部(工学部)同窓会 Facebookのお知らせ

同窓会長 松尾孝美

翔工会のFacebookを、東京支部副支部長の豊田耕一さんに開設していただきました。これから、内容を増やしていきたいと思っておりますので、どうぞ、ご利用をよろしくお願いたします。

Googleで、「大分大学工学部同窓会」で検索すると、以下のように、Facebookページを見つけることができます。



訃報

次の方の訃報に接しました。
謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

機 械	昭52年卒	河村(首藤)	明 様 (平25年11月20日)
機 械	昭54年卒	小 西 安	次 様 (平28年10月2日)
電 気	昭58年卒	吉 田 典	弘 様
組 織	昭53年卒	伊地知	守 様 (平28年)
知 能	平7年院修	木 村 寿	男 様 (平24年6月6日)
知 能	平21年卒	永 井 翔	太 様 (平27年12月)
化 環	平3年卒	古 本 和	広 様 (平28年2月)
建 設	昭60年卒	武 田 道	弘 様 (平27年)
建 設	平16年院修	秋 田 智	洋 様 (平29年7月)
電 子	平1年院修	佐 藤 洋	史 様 (平29年4月29日)
電 子	平1年卒	林 和	美 様 (平28年12月28日)

翔工会ホームページのお知らせ

・ホームページのURL

<http://shokou.csis.oita-u.ac.jp/>

機関誌PDFをダウンロードできます。
また、住所変更もできます。

・ホームページに関する質問や要望

同窓会活動に関する質問、要望等ございましたら、
shokou-request@oita-u.ac.jp
までご連絡ください。



理工学部ホームページのお知らせ

・ホームページのURL

<https://www.st.oita-u.ac.jp/>

各学科のホームページも紹介しております。
今現在の理工学部・各学科の様子をぜひご覧ください。



編集後記

機関誌発行委員長 創生工学科 電気電子コース 原 正 佳

翔工第28号の発行に際しまして、ご多忙中にも関わらず、快くご執筆をお引き受け下さいました先生方、卒業生ならびに在校生の皆様に厚くお礼申し上げます。また各部会編集委員、同窓会事務の方々に感謝いたします。

学部も理工学部へと変わりましたが、これからも会員相互の情報機関誌として、卒業生と同窓会、研究室とのつながりを大事にしていきたいと思っておりますので、皆様の近況報告などの寄稿や情報をお寄せいただきますようよろしくお願いいたします。